

A-3 17世紀初頭のデンマーク語従属節における副詞句の配置とOV語順に関する調査

—法律文書とレシピ本の比較から—

大西貴也 (東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC1)

takayanhyk@gmail.com

要旨：デンマーク王国で話されているデンマーク語は、現代では固定化された厳格な語順の規則を持つが、古くは語順の自由度が高く、現代語では見られないような語順のバリエーションも見られた。本発表では、17世紀初頭に書かれた法律文書 *Krigsordinans* とレシピ本 *Koge Bog* の2つに現れる従属節を対象に、1) 定動詞と副詞句の配置 (定動詞と副詞句のどちらが前に置かれるか)、2) 定動詞・動詞の非定形・項の配置 (VO語順/OV語順) の2点に着目して調査を行なった。1) に関しては、どちらの資料においても副詞句が定動詞より前に置かれる語順 (現代語と同じ語順) の頻度が圧倒的に高かった。それに対し、2) に関しては、レシピ本ではVO語順 (現代語と同じ語順) が大部分の箇所で見られていたのに対して、法律文書ではOV語順の頻度も高いという違いが見られた。17世紀後半のデンマーク語法律文書を調査した Petersen (2012) の提案と同様に、法律文書におけるOV語順の頻度の高さの要因の一つには、同時代にデンマークの場面で影響力を持っていた高地ドイツ語の影響があるという可能性が考えられる。

1. はじめに

1.1. デンマーク語について

現代デンマーク語は主におおよそデンマーク王国の現在の領土に含まれるシェラン島・フン島・ユトランド半島で話されている言語である。当言語はインド・ヨーロッパ語族、ゲルマン語派のうち、北ゲルマン語群に分類される。北ゲルマン語群に属する言語は、地理的分類に基づき、大陸スカンディナヴィア諸語 (Mainland Scandinavian) と島嶼スカンディナヴィア諸語 (Insular Scandinavian) に分けることができる。前者にはデンマーク語・スウェーデン語・ノルウェー語が属し、後者にはアイスランド語やフェーロー語が属する。前者に含まれる言語は方言連続体をなしており、それぞれの言語同士でのかなりの相互理解が可能である (Faarlund, 2019: 1)。それゆえ大陸スカンディナヴィア諸語間で共通の現象も少なくないが、本発表ではデンマーク語のみを調査の対象とする。

デンマーク語の時代区分について、本発表では Skautrup (1944–1970) に従い、以下の表に示されるような時代区分の名称を用いる。

おおよその時期	名称
200–800年	ノルド祖語 (urnordisk)
800–1100年	古デンマーク語 (olddansk)
1100–1350年	前期中世デンマーク語 (ældre middeldansk)
1350–1500年	後期中世デンマーク語 (yngre middeldansk)
1500–1700年	前期新デンマーク語 (ældre nydansk)
1700年–現代	後期新デンマーク語 (yngre nydansk)

* 本稿の内容に関しては、東京大学言語学研究室の各位から有益なコメントをいただいた。本研究はJSPS 科研費 JP22KJ1135 の助成を受けたものである。

1.2. デンマーク語の語順とその歴史的変遷について

主に Heltoft (2019) に従い、デンマーク語の語順の歴史的変遷について概観を行う。前期中世デンマーク語 (1100–1350 年頃) においては主節と従属節における語順の違いは特になく、どの節においても (接続詞を度外視して) 定動詞は節の 2 番目に置かれた。(定動詞第 2 位語順、V2 語順)。(1) は従属節における例である。

(1) 前期中世デンマーク語 (1300 年頃)

at han ma æi kummæ
that he can not come

「彼が来られないということ」(*Jyske Lov*; NKS295,8: 22v)

従属節語順に変化が生じ始めたのは 1300 年代のことである。後期中世デンマーク語 (1350–1500 年頃) の時期には、従属節において定動詞の前の位置に 2 つ以上の要素が現れることが可能となった。この語順が、以下に示すような現代デンマーク語における主節と従属節の語順の違いの元になったと言える。

Lundskær-Nielsen and Holmes (2015: 575, 582) に示されている現代デンマーク語の語順の概略図を、各用語を日本語に訳した上で以下に示す。なお、主節における F の位置には主語・目的語・副詞句・節など様々な要素が置かれうる。F に主語が置かれない場合、主語は n の位置に置かれる。文副詞 (句) a には作用域を節全体に取るものや、否定辞 *ikke* ‘not’ のような語が含まれる。非定動詞 V の位置には、助動詞との組み合わせで用いられる不定詞や完了形・受動態を作る際に用いられる過去分詞が置かれる。

主節語順:

前域 **定動詞** [主語] **文副詞 (句)** 非定動詞 目的語/補語/真主語 他の副詞 (句)
F v n a V N A

(Lundskær-Nielsen and Holmes, 2015: 575 より引用)

従属節語順:

主節 従属接続詞 主語 **文副詞 (句)** **定動詞** 非定動詞 目的語/補語/真主語 他の副詞 (句)
... k_u n a v V N A

(Lundskær-Nielsen and Holmes, 2015: 582 より引用)

概略図の v と a の位置の違いから、現代デンマーク語においては主節と従属節の語順が異なることが見て取れる。すなわち、現代デンマーク語は、主節では定動詞第二位語順 (以下、V2 語順) を示すのに対し、従属節では定動詞が副詞の後方に置かれ、定動詞第三位の語順を示す (Lundskær-Nielsen and Holmes, 2015: 583)。(2) は現代デンマーク語における従属節の例である。

(2) 現代デンマーク語

Jeg spurgte hvorfor Jens *læste ikke / ikke læste bogen.

*I asked what-for Jens *read not / not read book-the*

‘I asked why Jens didn’t read the book.’ (Thráinsson, 2010: 1062 より引用)

このように、現代デンマーク語の主節と従属節においては、定動詞とその周辺に現れる副詞句の位置関係が異なる。

現代デンマーク語においては、この概略図に示される語順からの逸脱は基本的になく、語順は固定化している。しかし、後期中世デンマーク語の時期に変化が見られてから、語順が固定されるに至るまでには、長い時間を要した。上述した従属節における定動詞と副詞句の位置関係に関しては、前期新デンマーク語 (1500–1700 年頃) の時期、時代を下るにつれて現代デンマーク語と同様の語順の頻度が大きく増えた (Sundquist, 2003: 240-242) が、19 世紀に至っても、テキストによって頻度の差はあれど、まだ現代の従属節語順の固定化は完了しておらず、副詞句が定動詞の前にも後ろにも現れうる状態であった (Gregersen & Pedersen, 2000: 408-409)。加えて、定動詞やそれに付随する非定動詞の位置にもバリエーションが見られた。定動詞は現代語と異なり、節の末尾に置かれることもあった。また、非定動詞は定動詞の前にも後ろにも置かれた。このように、かつては現代語に比べて語順の自由度が高かったことが分かっている。

1.3. ドイツ語との関わり

中世以降のデンマーク語は、地理的に隣接する地域で話されていたドイツ語の影響を受けていた。12 世紀半ば以降、商業的な都市同盟であるハンザ同盟が力を持ち、北海からバルト海にかけて影響力を持っていた。ハンザ商人が活動していた地域においては、中世低地ドイツ語が交易のための国際語として機能していた (Peters, 2000)。低地ドイツ語は交易における文書語として、中心的な役割を果たすようになっていった。しかし、ハンザ同盟の衰退に伴い、1600 年頃までに低地ドイツ語は使われなくなっていった。代わって、宗教改革によってルター訳聖書が広まったことや、ドイツ中部からの移住者も増加したことなどの要因により、高地ドイツ語がデンマーク国内で影響力を持った (Petersen, 2012)。

Petersen (2012) は 1683 年に発布されたデンマーク法 (*Danske Lov*, 以下 DL) における VO 語順と OV 語順の出現頻度を調べ、OV 語順が高地ドイツ語の影響を受けたものである可能性について論じている。Petersen は助動詞と不定詞や過去分詞との組み合わせが現れている場合、定動詞・動詞の非定形・項の配置も調査している。結果としては、前期新デンマーク語で一般的な傾向にも、前期新高ドイツ語 (1350–1650 年頃) の語順にも一致していないため、ドイツ語の語順を直接取り入れているとは言えない。しかし、デンマーク語とドイツ語の言語接触が OV 語順の頻度を高めることに一役買っており、高位の役人たちが二言語に精通しているという理由に加え、自分たちが社会的に高い地位にあることを示す目的で、OV 語順が文体的手法として用いられているのだと述べている。

本研究では、Gregersen & Pedersen (2000), Sundquist (2003), Petersen (2012) といった語順に着目した研究を踏まえつつ、先行研究において比較的調査が手薄な 17 世紀初頭の資料を取り上げ、その従属節語順に着目して調査を行った。その上で、法律文書では、そうでない文献に比べ、DL 同様に OV 語順が多く見られることを示し、17 世紀初頭においても Petersen (2012) における、地位を表す文体的手法としての OV 語順という説明が適用できる可能性について論じる。

2. 調査について

本研究では、以下の 2 つの資料を調査の対象とした。

-*Koge Bog* (KB, 1616): 料理のレシピ本。ドイツ語で書かれた原典から抜粋・翻訳されたもの。

-*Krigsordinans* (KrO, 1615): 戦争における様々な法規定を記した文書。

前者のレシピ本はより一般庶民向けの資料として、後者の法律文書はより堅い文体で書かれた資料として、ジャンルの差異を意識して選出した。

今回の語順の調査の対象は従属節である。従属節には、従位接続詞・関係詞・疑問詞によって導入され、主節の一要素として組み込まれている節が含まれる。なお、従属節内部に等位接続詞がある場合、複雑化を防ぐべくそれより前の要素までを調査対象とした。

1) 定動詞と副詞句の配置、2) 定動詞・動詞の非定形・項の配置の2点に注目し出現頻度を計数した。

1) について、副詞句が現れる従属節のうち、定動詞と副詞句の前後の位置関係を調べて計数した。なお、1.2 節において述べた現代デンマーク語の語順と同様、節末尾にも副詞句は置かれるが、節の末尾に定動詞と副詞句のみが置かれているような例では、それが動詞周辺に置かれる副詞句なのか、節末尾に置かれる副詞句なのか判断が難しいため、調査対象からは除外した。

2) について、動詞の項が現れている節に関して調査を行なった。なお、代名詞は通常の名詞句と異なる位置に現れることも多いため、語順に関する記述が複雑化すると予測される。したがって、今回の調査では代名詞を除く名詞句が目的語となっている場合を対象とした。項に関しては、Petersen (2012) に従い、例えば前置詞句のような副詞句が項であるかどうかの判断は難しいため、目的語と述語のみを対象にした。

3. 調査結果

本節では、前節で示した2つの資料について調査した結果を示す。なお、略号は以下の通り。a: 副詞句、Vf: 定動詞、Vi: 非定動詞(動詞の非定形)、Arg: 項

3.1. 定動詞と副詞句の配置

表1は1)の結果をまとめたものである。両者が隣接している例が大半であったが、定動詞やその他の要素の位置が異なるために、定動詞と副詞句が隣接していない例も少数ながら見られた(KB: 3例、KrO: 10例)。これらの隣接していない例は全て定動詞より前に副詞句が置かれている例であり、全て[a-Vf]に含まれている。

表1 KBとKrOの従属節における定動詞と副詞句の配置

	a-Vf	Vf-a	計
KB	131 (92%)	11 (8%)	142 (100%)
KrO	58 (98%)	1 (2%)	59 (100%)

3.2. 定動詞・動詞の非定形・目的語の配置

表2は2)の結果をまとめたものである。なお、項が現れないけれども定動詞と非定動詞がともに現れる例に関しては、大部分が[Vf-Vi]の順番で現れ、現代語と同じ語順になっていることが分かる(cf. 項が現れない[Vf-Vi]の用例数は、KB: 127例中123例、KrO: 49例中41例)。

表2 KBとKrOの従属節における定動詞・動詞の非定形・項の配置

	Vf-Arg	Arg-Vf	Vf-Vi-Arg	Arg-Vf-Vi	Arg-Vi-Vf	計
KB	90 (78%)	4 (3%)	21 (18%)	1 (1%)	0 (0%)	116 (100%)
KrO	19 (43%)	20 (45%)	1 (2%)	3 (7%)	1 (2%)	44 (100%)

以下の表3は、表2の結果をOV語順かVO語順かでまとめ、割合を示したものである。便宜上、項が動詞に先行する場合OV語順、後続する場合VO語順と呼ぶことにする。[Vf-Arg]、[Vf-Vi-Arg]を

VO 語順、[Arg-Vf]、[Arg-Vf-Vi]、[Arg-Vi-Vf] を OV 語順としてまとめ、合計の値を示した。

表 3 KB と KrO の従属節における VO 語順/OV 語順の割合

	VO 語順	OV 語順	計
KB	111 (96%)	5 (4%)	116 (100%)
KrO	20 (45%)	24 (55%)	44 (100%)

4. 考察

4.1. OV 語順について

前節で示した調査結果を踏まえ、ジャンルによる語順の違い、当該時期における従属節語順の様相、Petersen (2012) の提案するような文体による語順の選択が行われている可能性について検討する。

表 1 について、KB においても KrO においても、定動詞と副詞句の配置が [a-Vf] の語順となっている節の方が圧倒的に多いことが分かる。第 1 節で述べたように、[a-Vf] の語順は現代デンマーク語の従属節において文法的であるとされている語順である。すなわち、この現代語と同じ新しい語順は、少なくとも 17 世紀初頭のこれら 2 つの文献においてほぼ浸透していたと言える。

表 2 について、KB ではほとんど全ての節で [Vf-Arg] や [Vf-Vi-Arg] という現代デンマーク語と同様の新しい語順が見られることが見て取れる。したがって、従属節全体に VO 語順が浸透していると言える。それに対して、KrO ではそれらの語順に加え、[Arg-Vf] や [Arg-Vf-Vi] といった語順も比較的多く見られる。すなわち、KrO では KB に比べて語順の自由度が高いということに加え、表 3 から分かるように、OV 語順が多く見られる。しかし、VO 語順の頻度も低いわけではなく、同じくらいの割合を示しており、KrO では VO/OV 語順に関しては両方の語順が共存していると言える。

一般的に、法律文書ではより古めかしい言語形式が使われる傾向にあると言える。以下の例文 (3) と (4) を比較されたい。(3) は後期中世デンマーク語の時期の文献に、(4) は KrO に見られる類似の語順の例である。どちらも [O-Vf] の語順を示している (O: 目的語)。なお、(3) の出典である *Lucidarius* は「主としてキリスト教の教義を扱った問答型の書物」(大辺, 2008: 85) であり、最古の写本 AM76,8 は 1400 年代半ばのものであるとされているが、記述内容等から 1300 年代後半のデンマーク語が反映されていると考えてよいと見られる (大辺, 2008: 106, 注 4)。

(3) the (..) æræ saa gladæ, at the hans ænlædæ [O] see [Vf]
they are so glad that they his face see

「彼らは彼の顔を見て喜んでいる」(*Lucidarius* (AM 76,8), bl. 72r)

(Heltoft, 2019: 137, 例文 37 より引用)

(4) nar capiteinen samme soldat [O] begierer [Vf]
when the master same soldier desire

「主人が同じ兵士を望むとき」(*Krigsordinans*, 1615)

このように、OV 語順は元々デンマーク語に存在した古い語順であり、その語順が KrO に残っているとも考えられる。

その一方で、定動詞に対する副詞句の位置については、KB だけでなく KrO においても副詞句が定動詞に先行するという、より新しい語順がほぼ浸透していると言える。つまり、従属節における定動詞と副詞句の配置に関しては法律文書である KrO においても古い語順はほとんど見られないということ

になる。一方で、より一般向けの文体で書かれたと思われる KB における調査結果を見るに、当時のデンマーク語では VO 語順がより一般的であったと思われる。したがって KrO においては、今回調査した 2 つの語順に関する現象のうち、VO/OV 語順の選択においてはより新しい語順が常には用いられていないということになる。このことの要因や動機を考えたい。

上述のように、Petersen (2012) は 17 世紀後半の法律文書である DL について以下のように述べている。すなわち、宮廷の役人の地位の高さを示すための格式高い文体が用いられており、これはデンマーク宮廷において高地ドイツ語が政治的に重要となったことと、宮廷の役人がデンマーク語は勿論、高地ドイツ語にも精通していたという二言語使用に起因するということである。格式高い文体を必要としない KB との比較から、17 世紀初頭の法律文書である KrO においてもこの格式高い形式として OV 語順が用いられているという、同じ説明が当てはまる可能性がある。

高地ドイツ語の従属節語順において特徴的なことは、定動詞が節末尾に置かれることである。しかし、初期新高ドイツ語では前置詞句などの枠外配置もまだ頻繁に見られた (荻野・斎藤, 2015: 347)。枠外配置の場合、見かけ上定動詞が節の末尾より前の位置に置かれることになるが、目的語などは定動詞より前に置かれることになる。主節の V2 語順などデンマーク語と類似している点も多い一方、ドイツ語にのみ見られる語順があったということであり、語順を全体的に借用するのではなく、ドイツ語に堪能なデンマーク語母語話者の役人がそれを部分的に再分析してデンマーク語に取り入れた可能性が考えられる。また、この語順が (3) のようなデンマーク語の古めかしい語順と関連している可能性もある。

4.2. 主語を欠く節における要素の前置について

中世デンマーク語では、主格の関係代名詞によって導入される節や非人称の節のように、主語を欠く節において、本来定動詞より後ろに置かれる要素が定動詞より前の位置に置かれる現象が見られる (cf. Holmberg, 2017)。これは現代に近づくにつれて廃れていった現象である。本調査では、当該の現象によって OV 語順となっている節も調査対象に含んでいるが、KB ではほとんど OV 語順の従属節がないことから、この前置現象のうち動詞の項に関わる例は従属節でほとんど見られないことが分かる。また、KrO でも当該現象の明確な例は多くない。例文 (5) のように、KB ではコンピュータとともに用いられている例が多い。

(5) om mueligt er
 if possible is
 「もし可能であれば」 (Koge Bog, 1616)

この前置現象が起きうる条件が整っている節であっても、一部の場合を除いては前置が起こらなくなっていることから、定動詞と副詞句の配置の場合と同様、テキストのジャンルを問わずこの現象は衰退に向かっていると考えられる。したがって、この前置現象によらない OV 語順は、当時廃れつつあった他の古い現象とは一線を画しており、何かしらの役割を担っていた可能性が高い。そして、この OV 語順が KrO に見られて KB ではほとんど見られないことから、Petersen (2012) の提案するような、OV 語順によって格式高い文体を表しているという説明は妥当であると思われる。

5. 結論

本研究では、Koge Bog (レシピ本) と Krigsordinans (戦争に関する法令) の 2 つの資料を用いて、定動

詞と副詞句の配置、並びに定動詞・動詞の非定形・項の配置の2点について調査をおこなった。結果として、どちらの資料でも副詞句は定動詞の前に現れることが多かった。一方で、KB ではほとんど全ての節が VO 語順であったのに対し、KrO においては VO 語順と OV 語順の例が同じくらいの割合で見られた。廃れつつあった他の現象と一線を画する KrO の VO 語順は、Petersen (2012) の提案と同様、ドイツ語の直接的な語順の模倣ではないが、影響を受けている可能性はあり、17 世紀初頭の資料でも同様に格式高い文体を表すという役割を担っていると考えられる。今後の課題は、他の時期・ジャンルの資料を幅広く調査することである。

資料

Jyske Lov: Johs Brøndum-Nielsen; Poul Johannes Jørgensen (eds.) (1933-1961). *Danmarks gamle Landskabslove med Kirkelovene I-VIII*. Copenhagen: Gyldendalske boghandel. 以下のデジタル化テキストを利用: Det danske sprog- og litteraturselskab (デンマーク言語学・文学協会). *Jyske Lov* (NKS 295, 8vo). In: *Tekster fra Danmarks middelalder og renæssance 1100–1550*. Available online at: <https://tekstnet.dk/jyske-lov/metadata>
Køge Bog: Renæssancens sprog i Danmark. Available online at: <http://renaessancesprog.dk/>
Krigsordinans: Denmark. (1888). *Corpus constitutionum Daniæ: Forordninger. Recesser og andre kongelige Breve, Danmarks Lovgivning vedkommende, 1558–1660*. Vol. 3. 464–474.

参考文献

- Faarlund, Jan T. 2019. *The Syntax of Mainland Scandinavian*. New York: Oxford University Press.
- Gregersen, Frans & Inge Lise Pedersen. 2000. A la Recherche du Word Order not quite perdu. In: Susan C. Herring, Pieter van Reenen & Lene Schøsler (eds.), *Textual Parameters in Older languages*. 393–431. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Heltoft, Lars & under medvirken af Marita Akhøj Nielsen. 2019. Fra gammeldansk til nutidsdansk. In: Hjorth, E., Jacobsen, H. G., Jørgensen, B., Jacobsen, B., Jørgensen, M. K. & Fahl, L. K. (eds.) *Dansk Sproghistorie: Bøjning og bygning*. 129–225. Aarhus: Det Danske Sprog- og Litteraturselskab & Aarhus Universitetsforlag (Dansk sproghistorie, Vol. 3).
- Holmberg, Anders. 2017. Stylistic Fronting. In: Martin Everaert and C. Van Riemsdijk (eds.) *The Wiley Blackwell Companion to Syntax*. Second Edition. 1–46.
- Lundskær-Nielsen, Tom, and Philip Holmes. 2015. *Danish: A comprehensive grammar*. New York: Routledge.
- 大辺理恵. 2008. 「Lucidarius に見られる中世デンマーク語法助動詞の意味論的考察」『IDUN : journal of Nordic studies : 北欧研究』18号, 85–114.
- 荻野蔵平・齋藤治之. 2015. 『歴史言語学とドイツ語史』. 東京: 同学社.
- Peters, Robert. 2000. Die Diagliederung des Mittelniederdeutschen. In: Werner Besch, Anne Betten, Oskar Reichmann & Stefan Sonderegger (eds.), *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter. 1478–1490.
- Petersen, Kathrine T. 2012. Hvor verbet retteligen placeres skal — en undersøgelse af OV-ledstilling i Danske Lov. *Arkiv foer Nordisk Filologi*. 127, 145–171.
- Skautrup, Peter. 1944–1970. *Det danske sprogs historie*, Vol. 1–5.
- Sundquist, John D. 2003. The Rich Agreement Hypothesis and Early Modern Danish embedded-clause word order. *Nordic Journal of Linguistics*. 26.2, 233–258. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thráinsson, Höskuldur (2010). Predictable and unpredictable sources of variable verb and adverb placement in Scandinavian. *Lingua*. 120(5), 1062–1088.